

少年少女のための

13

現代日本文学全集



集 哉郎 直善 賀與 志長

編

集

責任編集

久伊福

松藤田

潜清

一整人

NDC 918.6

少年少女のための

現代日本文学全集 13

志賀直哉
長与善郎
集

定価 二五〇円

昭和三十年十月三十一日 初版発行

昭和三十三年八月 十日 再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 千代田区神田神保町二ノ二一

発行所 東西文明社

中興堂
製本所
石毛製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の、眞実や美をするどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本のせきれない作品や、もとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によって書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることが、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしろしてくれておりますので、きつと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであります。

編集者

久松 潜 一
伊藤 整
福田 清 人

★ 本文中、唐(むかし)
字で入れてあるのは、
中国の名)のように、
かっこの中に小活
字で入れたのは、
編集部でつけた註です。

志賀直哉集もくじ

菜なの
花はなと
小こ娘すめ・

宿やどか
りの
の
死し

山の木と大鋸

か
く
れ
ん
坊

輕便鐵道

或る朝・

母の死と新しい

夫の云ふ通り、
車と女

青兵衛と孤童

小曾の申儀

走しりままでで

焚^{たぎ}
火^ひ

雪ゆき
の
遠えん
足そく

灰色の月

● ● ● ● ● ● ●

玄人素人

七

11

四

一

30

100

2

12

1

四六

六

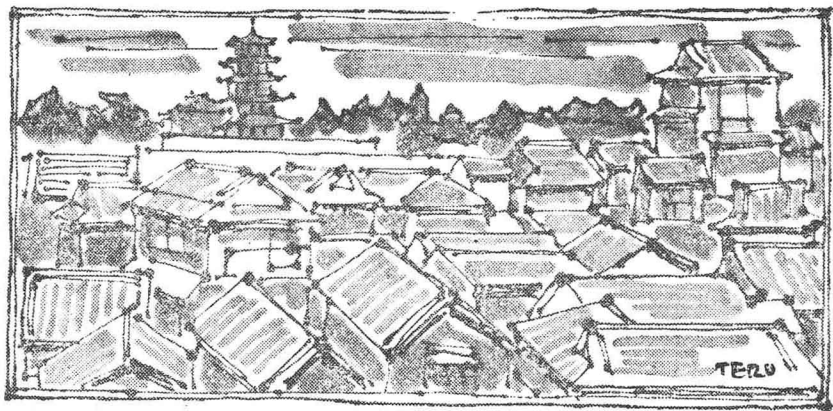
九四

五〇

—

六

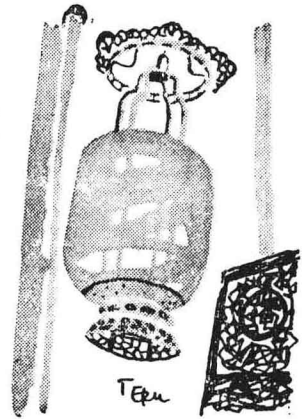
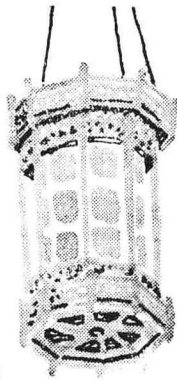
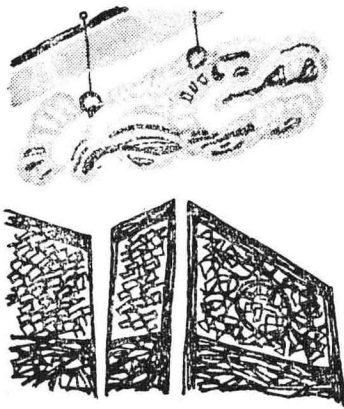
0:



長與善郎集もくじ

三人の時計	さん ねん と けい	一四
兎	うさぎ	一五
麒麟児	きりん じ	一六
年少信長	ねん しょう のぶ なが	一七
哀れな少女	あわれ しょうじょ	一八
青銅の基督(抄)	せいどう きりすと	一九
春景小品二三	しゅんけい しょうひん	二〇
解説 福田清人		二一

そうてい
カッ ト
青山龍水
山本耀也



志^し

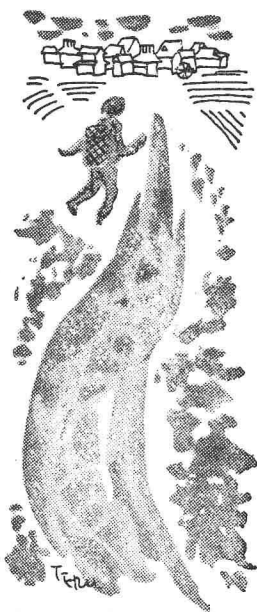
賀^が

直<sup>な
ち</sup>

哉^や

集<sup>し
ゆう</sup>

葉の花と小娘



ある晴れた静かな春の日の午後でした。ひとりの小むすめが山で枯れ枝を拾っていました。

やがて、夕日が新緑のうすい木の葉をすかして赤々と見られるころになると、小むすめは集めた小枝を小さい草原に持ち出して、そこで自分の背負つて来たあらい目かごにつめはじめました。

ふと、小むすめはたれかに自分がよばれたような気が

しました。

「ええ？」小むすめは思わずそう言って、立ってそのあたりを見まわしましたが、そこにはたれのすがたも見えませんでした。

「私をよぶのはたれ？」小むすめはもう一度大きい声でこう言ってみましたが、やはり答える者はありませんでした。

小むすめは二三度そんな気がして、はじめて気がつく、それは雑草の中からただひと本、わずかに首をさし出していた小さい菜の花でした。

小むすめは頭にかぶっていた手ぬぐいで、顔の汗をふきながら、

「おまえ、こんなところで、よくさびしくないのね」と言いました。

「さびしいわ」と菜の花は親しげに答えました。

「そんならなぜ来たのさ」小むすめはしかりでもするよな調子で言いました。すると菜の花は、

「ひばりの胸毛むなげに着いて来た種がここでこぼれたのよ。こまるわ」と悲しげに答えました。そして、どうか私を

おなかまの多いふもの村へ連れて行ってくださいとたのみました。

小むすめはかわいそうに思いました。小むすめは菜の花の願いをかなえてやろうと考えました。そして静かにそれを根からぬいてやりました。そしてそれを手に持って、山道を村のほうへと下って行きました。

道にそうて清い小さな流れが、水音をたてて流れていました。しばらくすると、

「あなたの手はずいぶんほてるのね」と菜の花は言いました。「あつい手で持たれると、首がだるくなってしまうわ、まっすぐにしておられなくなるわ」と言うてうなだれた首を小むすめの歩調に合わせて、力なくふっていました。

小むすめはちよつと当惑(どうわく)しました。

しかし小むすめにははからず、いい考えがうかびました。小むすめは身軽く道ばたにしゃがんで、だまって菜の花の根を流れへひたしてやりました。

「まあ！」菜の花は生き返ったような元気な声を出して小むすめを見上げました。すると、小むすめは宣告する

ように、

「このまま流れて行くのよ」と言いました。

菜の花は不安そうに首をふりました。そして、

「先に流れてしまふとこわいわ」と言いました。

「心配しなくてもいいのよ」そう言いながら、早くも小むすめは流れの表面で、持っていた菜の花をはなしてしまいました。菜の花は、

「こわいわ、こわいわ」と流れの水にさらわれながら、みるみる小むすめから遠くなるのをおそろしそうにさけびました。が、小むすめはだまって両手をうしろへ回し、背ではねる目かごをおさえながら、かけて来ます。

菜の花は安心しました。そして、さもうれしそうに水面から小むすめを見上げて、何かと話しかけるのでした。どこからともなく気軽な黄ち、う、が飛んで来ました。

そして、うるさく菜の花の上について飛んで来ました。菜の花はそれをもたいへんにうれしがりました。しかし黄ち、う、はせつかちで、移り気でしたからいつかまたどこかへ飛んで行ってしまいました。

菜の花は小むすめの鼻の頭にポツポツと玉のような汗

がうかび出しているのに気がつきました。

「こんどはあなたが苦しいわ」と菜の花は心配そうに言いました。が、小むすめはかえってぶあいそうに、

「心配しなくてもいいのよ」と答えました。

菜の花は、しかられるのかと思つて、だまつてしまいました。

まもなく小むすめは菜の花の悲鳴におどろかされました。菜の花は流れに波うつている髪かみの毛のような水草に、根をからまれて、さも苦しげに首をふっていました。

小むすめは息をはずませながら、「まあ、少しそうしてお休み」と言つてそばの石に腰こしをおろしました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、氣持が悪いわ」そう言いながら、菜の花はなおしきりにイヤイヤをしていました。

「それで、いいのよ」小むすめは言いました。

「いやなの、休むのはいいけど、こうしているのは氣持が悪いの。どうかちょっとあげてください。どうか」と菜の花はたのみましたが、小むすめは、

「いいのよ」とわらつて取り合いません。

が、そのうち水の勢いで菜の花の根は自然に水草からすりぬけて行きました。そして不意に、

「流れるうー」と大きな声をして菜の花はまた流されて行きました。小むすめも急いで立ち上がると、それを追つてかけだしました。

少し来た所で、

「やはりあなたが苦しいわ」と菜の花はコワゴワ言いました。

「なんでもないのよ」と小むすめもやさしく答えて、そうして、菜の花に氣をもませまいと、わざと菜の花より二三間先をかけて行くことにしました。

ふもとの村が見えて来ました。小むすめは、

「もうすぐよ」と声をかけました。

「そう」と、うしろで菜の花が答えました。

しばらく話は絶えました。ただ流れの音にまぎつて、パタパタ、パタパタ、と小むすめのぞうりで走る足音が聞えていました。

チャポーンという水音が小むすめの足もとでしました。菜の花は死にそうな悲鳴をあげました。小むすめはおど

ろいて立ち止まりました。見ると菜の花は、花も葉も色がさめたようになって、

「早く早く」とのび上がっています。小むすめは急いで引きあげてやりました。

「どうしたのよ」小むすめはその胸に菜の花をたくようにして、うしろの流れを見まわしました。

「あなたの足もとから何か飛びこんだの」と菜の花は動悸がするので、ことばを切りました。

「いばがえるなのよ、一度もぐって不意に私の顔の前にかび上がったのよ。口のところがたいじの悪そうな、あのかっぱのような顔に、もう少しで、私ははつぺたをぶつけるところでしたわ」と言いました。

小むすめは大きな声をしてわらいました。

「わらいごとじゃあ、ないわ」と菜の花はうらめしそうに言いました。「でも、私が思わず大きな声をしたら、こんどはかえるのほうでびっくりして、あわててもぐってしまいましたわ」こう言って菜の花もわらいました。

まもなく村へ着きました。

小むすめはさっそく自分の家の菜畑にいっしょにそれ

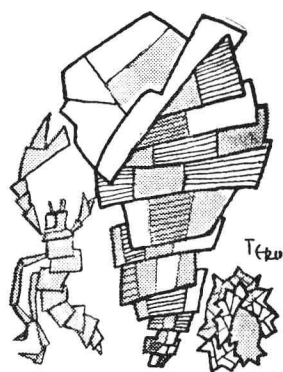
を植えてやりました。

そこは山の雑草の中とはちがつて土がよく肥えておりました。

菜の花はどんだんのび育ちました。

そうして、今はおおぜいのなかまとなかよく、しあわせにくらせる身となりました。

(大正九年一月)

宿^{やど}かりの死^し

大きなさざえのか
らにはいつているや
どかりが岩の上から
下にたくさん集まっ
ているきしゃごを見
おろして、「小さい
な」と思った。

「あいかわらずウジウジしていやがる」と腹で冷笑した。
かれは以前自分がそのからの一つにはいつてなかまの
ようにしていたことを思い出して、自分ながらもよくも
こんなに大きくなったものだとうぬばれた。
やどかりは勢いよくきしゃごをおし分けて岩をかけお
りると一度宙返りをしてどぶんと海の中へ飛びこんだ。

ワアーというきしゃごどものわらいはやす声が聞えた。
「ばかどもが」こう思いながらかれは大きな者のみが感
じられる寛大な心持を味わいながら海の底をのそのそと
歩いていった。

かれはそばに何かゴリゴリという音を聞いた。
見るとそれは自分よりも大きなさざえがソロソロと岩
をはい上がって行くところだった。かれは急にたまらな
いはずかしさを感じた。

かれはさざえに見つかからないようにぬき足さし足そこ
を退いた。

ひとりになるとかれは急にムカムカと腹がたってきた。
そしてすぐむりやりに自分のからをぬいてしまった。

砂地をこんどはソロソロと臆病にはって行つた。やわ
らかいしりが砂ですれていたくてやりきれなかった。

かれは苦しんだ。一日ひと晩苦しんだ。そしてやりき
れなくなつたときにちょうどここに非常に大きなほら貝
のからを見いだした。それはきのうかれをおびやかした
さざえよりもさらに大きかった。

かれは静かにしりのほうからその中にもぐりこんで、

やっと安心した。

その貝は重くかつかれのからだにはユルユルだった。

が、かまわず苦しい思いをしてそれを引きずって歩いた。

かれはまた大きくなろう大きくなくなろうという欲望に燃え立った。

一年ほどたった。

そしてかれはおどろくべき發育でそのほら、貝の中にいっぱいの大きさまで育った。もうそれを引きずって歩くことはなんの苦もなくなつた。

かれはあまりイライラしなくなつた。先ほどには大きくなろうという欲望も燃え立たなくなつた。

そのときかれはぐうぜんまたすてきに大きなほら、貝に出つくわした。

かれはびっくりした。ほとんど氣絶しかけた。

かれはさざえのからにはいつていたとき、大きなさざえに会つたときよりも倍の倍も自分をはずかしく感じた。腹をたてるにはもう力が足らなくなつた。

かれはまったく自分に失望した。

自分がどれほど大きくなるにしても、そこにはいつも

自分だけの大きさの貝がらがなければならぬと思つた。

かれはまったく絶望してしまつた。

かれはすぐさま自分のはいつていたほら、貝をすてしまつた。

かれはまたからなしていたさをがまんしてそろそろと病人のように海底の砂地をはって行つた。

ときどきそのそばを輕蔑するような横目使いをしながら伊勢えびがピンピンと勢いよくはねて通つた。たつのおとしごがげん顔をして立ち止まってかれを見送っていた。

かれはいよいよやりきれなくなつてきた。

それでもまだ何かを求めるように海の底を一方へ一方へズルズルとそのやわらかい腸のしりをひきずって歩いて行つた。

道々かれがはいれるくらいの大きなほら、貝のからにも出会つた。しかしかれはいまさらそれにもぐりこもうという氣はしなかつた。

かれは極端に憂鬱になつた。

力もなえてきた。

かれはもう自分も死ななければならぬと思つた。

なぜ自分の生涯しょうがいの結末がこんなにならなければならぬかつたろうと考えた。

それよりも何がただのやどかりでいられない欲望を自分にあたえたのだろう。

そしてそれはなんのためだろうと考えた。

かれがきしやごのからにいたころの夢想むさうはとうのむかしかれに來てしまつた。が、それはかれになんの幸福をも持ちきたさなかつた。かれは常に満たされずに來たのだ。

かれの精神も肉体もだんだんにまいつてきた。

とうとう動けなくなつた。

そして死んだ。

そこにちやうど近所の臨海試験所の船がやつて來た。

やどかりの死がいはいづせんにもそのあみにかかつて引き上げられた。

学者らはそれを見ておどろいた。どうしてこんな大きなやどかりができたのだろうとおどろき、かつその手にはいつたことを喜んだ。

かれらはすぐ船を引きかえしてさつそくそれをアルコ

ールづけにすると、世界じゆうにおそろくこんな大きなやどかりはあるまいと話し合つた。

かれらはドイツの動物学会あてにその報告書を書くことにした。

びんの外からやどかりのやわらかいしりのすりむけて腸はらわたの出た所をしきりにながめていたそのうちに博士はかせが、「あんまり大きくなりすぎて、もうはいる貝がらがなくなつて死んだに相違ちがひない」と言つた。

やどかりのからだはアルコールでそろそろ色が變つてきた。

そしてかれはまだ死んだときの絶望と苦悶くもんとを顔に表わして目をねむつたままにいる。

動物学者らもその表情はもとよりやどかりの心理については何も知ることはできなかつた。

(大正三年九月)

山の木と大鋸

虫がおそろしかった。小鳥のくちばしがおそろしかった。

若芽はのびた。

こんどはナイフがおそろしかった。つえを切りに来る人がジロジロとその辺を見まわしながら通って行った。

木はようやく太くなった。

小鳥が虫をさがしによく来てとまる。今は小鳥は愛らしくなった。

しかしなたがおそろしい。木こりが通る。あの腰のなたでポンポンと二度たたかれれば自分は胴切りになれる。早く太くなりたい。

こう思っているうちにまた少し太くなった。なたはたいておそろしくなくなった。

しかしのこぎりがおそろしい。早く大きくなりたい。しかし急ぐとあぶない、細いままでのびると風に折りたい。

虫や小鳥をおそれていた

若芽からは三十年たった。

あと百年たたねばのこぎりをまったくおそれない自分にはなれない。

ある日つえを取りに来た男がナイフで自分の膚に Aug. 1951. N.S. と彫りつけた。消えないようにとできるだけ深く彫りつけて行った。自分は微笑した。しかしこんな字が膚に残っているうちは安心できない。この彫った人間が年寄りになって死んで、その孫がまた年寄りになって死ぬ時代が来なければ安心できない。できるだけ地から精分をすわなければならぬ。できるだけ太陽の光を受けねばならぬ。そしてできるだけのにびて、できるだけ太くなろう。

百年過ぎた。

